

字書三部作

◆『字統』(平凡社 1984年)

- 漢字の構造を通じて、字の初形と初義を明らかにした「字源の字書」であり、その初形初義より、字義が展開分化してゆく過程を考える「語史的字書」であり、また、そのような語史的な展開を通じて、漢字のもつ文化史的な問題にもふれようとする「漢字文化の研究書」である。要約していえば、漢字の歴史的研究を主とする字書である。

◆『字訓』(平凡社 1987年)

- 日本において漢字を国字として使用し、その訓義が定着するに至った過程を、「古事記」「日本書紀」「万葉集」などにみえる古代語の表記法に求めて、その適合性を検証している。国語のもつ多様な表記法の全体にわたって、漢字との対応関係を概観することが本書の意図するところである。

◆『字通』(平凡社 1996年)

- 漢字本来の字義と、その用法を通じて示される字義の展開について明らかにした辞書。その用例は、かつて国民的な教養の書として親しまれていた文献や詩文から求め、読み下し文で掲げている。

(『立命館大学 白川静記念 東洋文字文化研究所』ホームページより)

この三部作の完成により朝日賞を受賞、翌年1998(平成10)年には、文化功労者として顕彰される。